中英語期の VS 語順：13 世紀と 14 世紀の 3 作品を比較して

小林　美樹

要　旨

本稿では、古英語的な古いタイプの語順である他動詞の VS 語順が中英語期に生産性を失うにつれて、この語順にどのような質的な変化が起こったのかを調査する。13 世紀、14 世紀の 3 つの作品を資料とし、VS 語順に起こる他動詞の性質の変化に焦点を当てるとともに、目的語が先行する VS 語順の使用実態にも注目する。

13 世紀の Ancrene Wisse では多様な他動詞が V2 現象を引き起こしており、この作品には古英語的な性質が窺える。一方、14 世紀の The Cloud of Unknowing では、他動詞 VS 語順の使用が定型的表現や、認識動詞、状態動詞にほぼ限られており、この語順の使用頻度の減少に伴い、現れる他動詞に質的な変化が起こることが認められた。しかし目的語に導かれる VS 語順は、目的語が前方照応的に前文との連結機能を果たす形でまだ一般的に起こっている。目的語以外の要素が先行する他動詞 VS 語順と、目的語が先行する VS 語順は必ずしも並行して減少したわけではない。

１．はじめに

古英語は厳密な意味での V2 言語ではない。Haeberli (2002) の古英語の調査によると、ほぼ絶対的に V2 を引き起こしていた *then*-group の副詞、否定辞、疑問詞以外の要素が文頭に現れ、また主語が代名詞以外である主節において、VS 語

順が起こらない割合は 28.7%である。一方、Haeberli (2007) によると、上記と同じ文環境においても、動詞が自動詞である場合には 8 割が VS 語順を示す。このように、古英語は厳密な V2 言語ではないものの、V2 現象は広く観察される。

中英語 (1150-1500) は、古英語がもつこのような V2 言語としての性質が失われていく時期である。しかし、中英語のほぼ同時期の作品でも、VS 語順の起こりやすさには開きがあり、原則的な V2 言語から非 V2 言語への変化は直線的なものではない。本稿では 13 世紀前半の Ancrene Wisse、14 世紀前半の Richard Rolle、14 世紀後半の The Cloud of Unknowing を資料とし、それぞれの作品において VS 語順が起こる環境を、動詞の性質と文頭要素の種類という観点から観察し、各作品が、英語が辿った非 V2 に向かう道筋のどのような位置にあるのかを考察する。

２．VS 語順に関する古英語的性質

本稿で扱う 3 つの作品が VS 語順に関して、どの程度古英語的な性質を残しているのか、また、その性質を失っているのかを考察するに際して、まず現代英語において一般的に起こる XVS 語順を示し、どのような XVS 語順が古英語的性質のものであるのかを明確にする。否定倒置構文と there に導かれる存在構文を除くと、現代英語の平叙文において XVS の X 位置に起こる要素としては、前置詞句、形容詞句、副詞句、また、動詞の現在分詞・過去分詞を主部とする句がある。

(1) <u>To his left</u> was a long, shadowy, cobbled passage running beside what looked like barred loose boxes.

(2) <u>Vital to such decisions</u> is a clear understanding of system functions, failure modes and the consequences of failure.

(3) <u>Here before me</u> were two people in love, oh yes.

(4) <u>Lying inside, wrapped in a clean woolen shawl</u>, was the smallest baby I had ever seen. (Kreyer (2006): 6-8)

動詞としては、be 動詞、非対格動詞がこの語順に現れ、(5)が示す様に、他動詞は一般的に XVS 構文には起こらない。

(5) * [In this rainforest] **can find** a lucky hiker the reclusive lyrebird.

(Haeberli (2010:18))

従って、本稿では以下のような XVS 語順を古英語的性質を保持した語順とみなす。

(6) **古英語的な古い語順**（中英語期に次第に消失に向かった語順）

(i) 他動詞や非能格動詞の VS 語順

(ii) 目的語が X 位置に現れる XVS 語順

（前置詞句、形容詞句、副詞句、動詞の現在分詞・過去分詞を主部とする句**以外**の要素が X 位置に現れる XVS 語順）

但し、他動詞の say は現代英語においても‘said he’のように VS 語順に起こることが可能であるため、古英語的な古い語順として扱わない。

３．資料とする作品

13 世紀前半の作品 Ancrene Wisse、14 世紀前半の Richard Rolle、14 世紀後半の The Cloud of Unknowing に起こる VS 語順を調査し、中英語の前期から後期にかけてこの語順の使用に関し、どのような変化が見られるのか、また、変化が顕著でないのはどのような点であるのかを考察する。Ancrene Wisse は修道女が守るべき戒律を説いた信仰の書、また、Richard Rolle の作品と The Cloud of Unknowing はキリスト教神秘主義文学であり、本稿で資料とする作品はどれも宗教書である点で共通している。

語順は、文体に関する書き手の個性の表れでもあり、SV/VS 語順に関する或る作品のデータが、その時代の文法を代表するものとはならない。実際、これまでなされた中英語の語順研究は、ほぼ同時期の作品でも VS 語順が起こる割合が大幅に異なる可能性があることを示している。例えば、Haeberli (2007) によると、共に 15 世紀中頃の作品である Book of Margery Kempe と Capgrave's Chronicle では、他動詞以外の動詞と完全名詞句が VS 語順で現れる割合は、それぞれ 36.5% と 74.0%であり、大きな開きがある (Haeberli (2007):19)[1]。

本稿で資料とする 3 作品は扱っている主題が同質であるため、これらの作品における VS 語順の現れ方に、各作者の文体の個性が大きく影響している可能性は少ないと考えられ、調査結果は個人的な好みというよりは文法が反映されたものと見做すことができるであろう。

４． Ancrene Wisse

４．１　動詞の種類

今回の資料の中で最も古い時代に書かれた作品は初期中英語に属する Ancrene Wisse であり、14 世紀後半の The Cloud of Unknowing との開きは 150 年ほどである。およそ 400 年間の中英語期のなかでは大きく時代が異なるとまでは言えないが、VS 語順が起こる動詞の多様性という点で、やはり Ancrene Wisse が、最も古英語的な性質を見せている。特に他動詞の VS 語順が後の時代の 2 作品よりも多くみられる。

以下ではまず、最も一般的に起こる VS 語順の構文を示す。本稿で VS 語順の調査に用いる文は主節の平叙文とし、現代英語でも原則的に倒置が起こる否定辞が文頭に生じる例は除いて示す。

中英語の他の作品と同様に、Ancrene Wisse においても非対格動詞と助動詞

[1] 疑問詞、否定辞、また、þa、þonne、nu が文頭位置に現れる場合は、原則的に、または高確率で VS 語順が引き起こされるため、この調査はこれらの要素が文頭位置を占める文を除いて行われている。

（法助動詞、完了・受動の助動詞）の存在が極めて高頻度で V2 を引き起こしている。以下の例文においては動詞を太字と下線で、主語を下線で示す。なお現代英語訳は、テキストと同様に TEAMS Middle English Texts からのものである。

(7) Nu **kimeth** forth a feble mon[2] (Part 2: 82)

'Now comes forth a feeble man'

(8) Al thus, leove sustren, i wreastlunge of temptatiun **ariseth** the biyete. (Part 4: 718)

'Exactly in this way (lit., completely thus), dear sisters, in wrestling (or, struggling) with temptation, a benefit mounts up for you.'

(9) Her-to **falleth** a tale, a wrihe forbisne. (Part 7 :58)

'Thereby hangs a tale (lit., concerning this [there] falls a tale), a hidden parable (or, an exemplum with a hidden meaning).'

(10) Thus **walde** Eve inoh-reathe **habben i-ondsweret**. (Part 2 :60)

'Thus would Eve readily enough have answered.'

(11) Of hire ahne suster **haveth** sum **i-beon i-temptet**. (Part 2 180-1)

'By her own sister has an anchoress (lit., some) [sometimes] been tempted.'

非対格動詞や助動詞が VS 語順に起こりやすいことは中英語を通じて一般的に観察されるが、Ancrene Wisse においては他動詞が VS 語順に起こることが少なくない。他動詞が助動詞を伴う場合の VS 語順については、助動詞がこの語順を引き起こしていると考えられるため、(12-17)では助動詞が起こらない例文のみを示す。また、現代英語においても倒置が起こるのが原則である、否定辞が文頭に置かれた文も除いて示す。現代英語訳において、原文で VS 語順に現れる他動

[2] テキストの文を文の途中まで引用した場合は、引用部分の最後の位置にコンマが無い例については、句読点をつけずに示す。

詞の意味を表わす部分に下線を引いて示す。

(12) Thus **bitacneth** hwit cros the warde of hwit chastete, (Part 2 :26)
'Thus the white cross symbolizes the protection of white chastity,'

(13) Ant nu **deth** Sein Austin ba twa theos in a couple (Part 2: 124-5)
'And now St. Augustine makes (lit., does) both these two into a couple:'

(14) Ma **sleath** word then sweord. (Part 2: 304)
'The word slays more than the sword'

(15) For-thi **feieth** Ysaie hope ant silence bathe togederes (Part 2: 365-6)
'Therefore Isaiah joins hope and silence both together'

(16) This featte kealf **haveth** the feond strengthe to unstrengen ant buhen toward sunne, (Part 3: 218-9)
'The fiend has the strength to unstrengthen (i.e., weaken) this fat calf and bow (or, bend) [it] toward sin,'

(17) For-thi **eveneth** Davith ancre to pellican thet leat anlich lif, ant to spearewe ane. (Part: 3: 626)
'For this reason David compares the anchoress to a pelican
which leads a solitary life, and to a solitary sparrow.'

助動詞を伴わない文において、他動詞が主語に先行する VS 語順は中英語期間中に次第に見られなくなる。Ancrene Wisse においては、(12-17)に示した bitacneth (symbolizes)、deth (does)、sleath (slays)、feieth (joins)、haveth (has)、eveneth (compares)の他にも、hat (commands)、threatith (warns)等、多様な他動詞が V2 現象を引き起こしており、Richard Rolle や The Cloud of Unknowing に比べて明らかに古英語的な性質が保たれている。

或る時代、或る作品の文法において V2 現象がどの程度生産的なものであるか

を示すためには、ひとつには V2 が起こる割合を調査し、数字で示す方法がある。時代によって、また作品によって英語が V2 現象に関し、どのように変化していったかを数字で示す調査は多く行われており、それに基づいた考察もなされている。英語の辿った変化が分かりやすく示され、作品間の違いも一目瞭然で、英語史研究に資するところが大きい。

ただ、当然ながら、言語が歴史的にたどった質的な変化は必ずしもこうした数字には表れない。例えば、Haeberli によれば、15 世紀の作品である Malory において完全名詞句と他動詞が VS 語順に起こる割合は 14.9%、他動詞以外の動詞の場合は 36.7%である (Haeberli (2010): 147)[3]。だが、実際に Malory の VS 語順を観察すると、この作品における他動詞の VS 語順は、その生産性に関して言えば、14.9%という数字が示唆するよりもさらに低いという印象を得る。

Malory の他動詞 VS 語順の特質を明らかにするため、以下にこの語順の例を示す。助動詞の現れる文においては、VS 語順を引き起こしているのは助動詞であると考えられるため、(18-21)には助動詞を伴わない例を示す。

(18) Than **<u>had</u>** <u>sir Gawayne</u> suche a grace and gyffte that an holy man had gyvyn hym, (Malory 704: 8-9)

(19) but well **<u>undirstood</u>** <u>sir Trystram</u> that sir Dynadan myght nat endure ayenste sir Launcelot, (Malory 458: 34-26)

(20) ‘Such one **<u>saw</u>** <u>I</u>,’ seyde kynge Arthure, (Malory 28: 31)

(21) And there **<u>dud</u>** <u>sir Lameroke</u> mervaylus dedys of armys (Malory 216: 21-22)

(小林 (2015): 12)

[3] Haeberli(2007)においてと同様に、疑問詞、否定辞、また、þa、þonne、nu が文頭位置に現れる場合は、原則的に、または高確率で VS 語順が引き起こされるため、この調査はこれらの要素が文頭位置を占める文を除いて行われている。

Malory に VS 語順で現れる他動詞は、(18)の **had** や(19)の **understand** のような状態動詞が多い。また(20)の **see** も他動詞ではあるが、他動性のある他動詞ではない。Malory においては、現代英語でも VS 語順が一般的に見られる say を除くと、(21)に現れる do のような他動性のある他動詞が VS 語順で現れることは少ない。

また、Malory に起こる他動詞の VS 語順は、一種の定型表現として起こることが少なくない。「誰々はこの様子を見ていた」ということを表わすために、(22-23)のように目的語が前置された VS 語順が起こることがよくある。

(22) And [all thys] **aspyed** sir Palomydes, (Malory 456: 37)

(23) And [all that] **aspyed** the quene (Malory 343: 9)

このように Malory においては、他動詞の VS 語順は、一種の定型表現として現れる、または他動性の無い他動詞が現れるということが多く、他動性をもつ他動詞は一般的に主語に先行しない。これはこの作品における他動詞の VS 語順は、質的に考えると、ほぼ生産性を失っていることを示しているといえるであろう。

一方、13 世紀前半の Ancrene Wisse では、(12-17)に示したように、他動詞の VS 語順が比較的多いだけでなく、この語順に現れる他動詞の種類が限定されていない。単に目的語を取るという形式上の他動詞ではなく、その意味に他動性のある他動詞が種類が限定されることなく VS 語順に現れている。5 節で示すように、14 世紀の Richard Rolle では、他動詞 VS 語順は頻度が減少すると同時に定型的表現に現れる割合が高くなる。Ancrene Wisse において他動詞 VS 語順が起こる様は、15 世紀の Malory や 14 世紀の Richard Rolle のそれとは異質であり、Ancrene Wisse では、この構文が生産性を保っていたことが窺える。

他動詞と同様に、非能格動詞の VS 語順も否定倒置を除いた平叙文では、中英語の期間中にほとんど起こらなくなる。Ancrene Wisse においても、自動詞の VS 語順のほとんどは(7-11)に見られるような非対格動詞であるが、(24-25)が示す様

に、少数の非能格動詞がこの語順に起こる。

(24) Of this meoster **servith** the unseli ontfule i the deofles curt, to bringen o lahtre hare ondfule laverd. (Part 4: 412-3)

'In this capacity the wretched envious [people] serve in the devil's court, to bring to laughter their envious lord.'

(25) Thus lo, in euch stat **rixleth** bitternesse (Part 6: 330)

'in each state (or, condition) bitterness reigns'

Ancrene Wisse の V2 現象は、関与する動詞について言えば、他動詞のふるまいに古英語的な性質が最も強く見られると言える。

４．２　文頭要素

現代英語でも XVS 語順の X 位置に一般的に起こる前置詞句、形容詞句、副詞句、動詞の現在分詞・過去分詞を主部とする句は、中英語期にも X 位置に頻出し、Ancrene Wisse についても同様である。前掲の(7-17)におても、Nu (now)、Al thus (completely thus)、Her-to (Therby)、Thus、Of hire ahne suster (by her own sister)、For-thi (therefore)といった、副詞句や前置詞句が現れている。(6)に述べたように、このような句以外の要素、即ち「目的語」が X 位置に現れる XVS 語順が古英語的な古い語順であると考えられる。Ancrene Wisse にはこのような目的語前置の VS 語順が起こる。

(26) (=(14)) [Ma] **sleath** word then sweord. (Part 2: 304)

'The word slays more than the sword;'

(27) [Swuch grure] **hefde** his monliche flesch ayein the derve pinen thet hit schulde drehen. (Part 2: 769-770)

'[Such horror] His manly (or, human) flesh had in anticipation of (lit., against) the torturous pains that it would suffer.'

(28) [Monie ma hwelpes then ich habbe i-nempnet] **haveth** the liun of prude. (Part 4: 252-3)

'The lion of pride has many more whelps than I have named.'

(29) [Theose] **threatith** thus Godd thurh Ysaie (Part 4: 455-456)

'God **warns** these [gluttons] through Isaiah, thus.'

(30) (=(16)) [This featte kealf] **haveth** the feond strengthe to unstrengen ant buhen toward sunne, (Part 3: 218-9)

'The fiend has the strength to unstrengthen (i.e., weaken) this fat calf and bow (or, bend) [it] toward sin,'

(26-29)の原文において角括弧で示した要素は、太字の動詞の目的語である。（(26)の Ma (more)は、その後ろに名詞が省略されている名詞句であると考えれば sleath (salys)の目的語である。しかし、副詞として機能している可能性も考えられる。）(30)の This featte kealf (this fat calf)は直後の動詞 haveth (has)の目的語ではなく、不定詞で現れている unstrengen (weaken)の目的語である。現代英語に比べ、語順が自由であった古英語的性質をこの文に見ることができる。

５． Richard Rolle

５．１　動詞の種類

次に 14 世紀前半の作品である Richard Rolle に起こる VS 語順について考察する。英語の歴史を通して VS 語順に生じることが多い非対格動詞と助動詞（法助動詞、完了・受動の助動詞）が、Richard Rolle においても、この語順に起こることが多い。以下の例において現代英語訳は、(37)以外は、Rosamund (1988)に依る。

(31) Agayn þe synne of felyng and of euele gatys, **were** þi handys and þi feet with harde nayles **thyrlyd**, (MP: 88)[4]

'To counteract sinning in the sense of touch and of walking in evil ways, your hands and your feet were pierced with hard nails,'

(32) þan **fel** þin heed doun, (MP: 103)

'then your head fell down,'

VS 語順に現れる他動詞の種類は、前節で扱った Ancrene Wisse ほど広範ではない。

(33) Þis gylder **layes** oure enmy to take vs with, (FL: 6)

'This is the snare our enemy sets to catch us with,'

(34) In þus many maners **touches** þe ymage of dremes men when þai slepe. (FL:16)

'In these numerous ways does the visual impression of the dream affect men when they are asleep.'

(35) Ful mykel grace **haue** þai þat es in þis degre of lufe. (FL: 31)

'Very great is the grace which those who are in this degree of love have,'

(36) bot þarfore **lufes** he hym noght, (FL: 38)

'yet it is not through those actions that they are loving God'

助動詞を伴う(37)のような例は複数起こるが、これらは他動詞 VS 語順の生産性を示すものではないであろう。

[4] Richard Rolle の作品名は略語を用いて示す。
MP: Meditations on the Passion
FL: The Form of Living

(37) Mikel lufe & ioy **sal** þou **fele**, if þou wil do aftyr þis lare. (FL: 35)
'Much love and joy shall you feel if you will follow this teaching.'

また、(38-39)のような他動詞の VS 語順が見られるが、このパターンは一種の定型表現のような形で用いられていると考えられる。

(38) For a thyng **warne** I þe (FL: 28)
'Now, I'll give you one warning'

(39) A thyng **tel** I þe (FL: 33)
'One thing I wil tell you'

(35)のような他動詞句が状態を表わすと考えれる例、(37)のような助動詞を伴う例、また、(38-39)のような定型表現のような形で使われている例を除くと、Richard Rolle において他動詞 VS 語順の起こる頻度は低い。

非能格動詞も他動詞と同様に、否定倒置を除くと現代英語では VS 語順に起こらない動詞である。Richard Rolle でも、(40)のような非能格動詞 VS 語順は稀にしか起こらない。

(40) SWete Ihesu, þanne **criedist þou** dolefulli on þe rode (MP: 101)
'Sweet Jesu, then you called out mournfully on the cross,'

５．２　文頭要素

古英語以来 V2 現象を強力に引き起こしてきた文頭要素 then-group の副詞が Richard Rolle においても XVS の X 位置に頻出する。þan、þanne、þenne (then)といった副詞がそれにあたり、(32)がその 1 例である。その他前置詞句も VS 語順に先行する X 位置に頻出するが、古英語的性質を表わす目的語前置も少なくな

い。本節では文頭要素に焦点を当てるため、主語に先行する動詞が助動詞である例も含めて示す。

(41) [þin eendles loue and ruþe]

may no man **telle** ne **biþenke**, (MP: 102)

'your endless love and pity no one can possibly reckon or even imagine,'

(42) Bot [mekenes & lufe] **may** he noght **haue**. (FL:40)

'but patience and love he cannot tolerate.'

(43) and [þat] **may** þou noght **do** bot if þou be wyse. (FL: 40)

'and you cannot do that unless you are intelligent'

(44) (=37) [Mikel lufe & ioy] **sal** þou **fele**, if þou wil do aftyr þis lare. (FL:35)

'Much love and joy shall you feel if you will follow this teaching.'

(45) (=33) [Þis gilder] **layes** oure enmy to take vs with, (FL: 6)

'This is the snare our enemy sets to catch us with,'

当然ながら目的語前置は、他動詞を含む文で起きる。しかし前述したように、Richard Rolle においては他動詞が主語に先行する XVS 語順は Ancrene Wisse に比較すると減少している。従って、目的語前置の例は、(41-44)が示す様に、助動詞を伴い、その助動詞が主語に先行する VS 語順の例が占める割合が大きくなっている。次節で扱う The Cloud of Unknowing は、書かれた年代が Richard Rolle と大きく離れているわけではないが、他動詞の VS 語順自体も、目的語前置も一層減少している。英語の歴史において、V2 現象の衰退は一直線に進んだわけではなく、同時代の作品間でも V2 の現れ方に大きな違いが見られることもあるが、今回調査した Ancrene Wisse、Richard Rolle、The Cloud of Unknowing は、時代順に少しずつ古英語的な性質が失われていく様を見せている。

６． The Cloud of Unknowing

６．１　動詞の種類

The Cloud of Unknowing に起こる VS 語順では、助動詞が極めて多く現われ、その他に be 動詞、非対格動詞が起こる。The Cloud of Unknowing に現れる語彙やつづり字は現代英語のものと大きく変わらないが、例文のつづり字等、現代英語との違いが大きい場合には、例文の下に現代英語訳を示す。

(46) On the same maner **schalt** thou **do** with this lityl worde *God.* (1461)[5]

(47) Bot then **is** the use ivel (534)

'But then is the use evil'

(48) For on the wetyng and the felyng of thiself **hangith** wetyng and felyng of alle other creatures (1535-6)

'For on the witting and the feeling of thyself hangeth witting and feeling of all other creatures'

(49) Treuly of this disceite, and of the braunches therof, **spryngyn** many mescheves (1606-7)

'Truly, of this deceit, and of the branches thereof, spring many mischiefs'

他動詞の VS 語順は、Richard Rolle においてよりもさらに減少し、他動性のある他動詞が助動詞を伴わずにこの語順に現れることは稀である。

(50) Fleschly jangelers, glosers and blamers, roukers and rouners, and alle maner of pynchers, **kept** I never that thei sawe this book (2477-8)

'Fleshly janglers, flatterers and blamers, ronkers and ronners, and all manner

[5] 括弧内の数字は、TEAMS Middle English Texts での該当箇所の行数を示す。

of pinchers, cared I never that they saw this book: for mine intent was never to write such thing to them.'

(51) And thus **wenyn** ofttymes som yong foles that God is theire enemye, when He is theire ful freende. (2505-6)

'And thus ween ofttimes some young fools, that God is their enemy; when He is their full friend.'

(52) And yit **thoughte** He it not inowgh, (2015-6)

'And yet thought He it not enough,'

(53) Moche love **had** sche to Hym; moche more **had** He to hir.

(50-52)に現れる他動詞は目的語として節を取る認識動詞であり、他動詞であっても他動性は無い。また、(53)は「愛情をもっていた」ということを表わす文であり、have は状態動詞である。

他動性のある他動詞が助動詞と共起せずに SV 語順に起こることは稀である。(54)のような例が見られるものの、以下で述べるように、このような例は Cloud of Unknowing において他動詞の VS 語順が生産的であったことを示すものではないと考えられる。

(54) Moo sleightes **telle** I thee not at this tyme (1238)

'More devices tell I thee not at this time'

以下の(55)は(54)と同様に伝達動詞が起こる例である。2 節で伝達動詞 say の SV 語順は、古英語的な古いタイプの語順とはみなさないと述べたが、(54)の説明のために、say の目的語が前置された SV 語順の例(55)を挙げる。なお、この文において主語に先行しているのは、助動詞である。

(55) Bot this **<u>may</u>** <u>I</u> **<u>sey</u>** thee of thoo sounes and of thoo swetnes (1716)
'But this may I say thee of those sounds and of those sweetnesses'

(54-55)も、前節で示した Richard Rolle の(38-39)も、伝達動詞が間接目的語の þe や thee を伴って、VS 語順の文に起こる例である（(55)においては助動詞と主語の VS 語順)。これらは、話を進める際に用いられる一種の定型表現であり、これから読者に提示する内容を導くために用いられていると考えられる。同様の例として(56)がある。

(56) And to this **wil** <u>I</u> **<u>answere</u>** thee so febely as I kan, (2108)
'And to this will I answer thee so feebly as I can,'

4.1 で示したように、既に他動詞の VS 語順が非生産的になっている 15 世紀の Malory においても、(57-58)のような「誰々はこの様子を見ていた」ということを表わす定型表現においては、他動詞が主語に先行して起こる。

(57=((22)) And [all thys] **<u>aspyed</u>** <u>sir Palomydes</u>, (Malory 456: 37)
(58=((23)) And [all that] **<u>aspyed</u>** <u>the quene</u> (Malory 343: 9)

従って、(54)のような例の存在は、Cloud of Unknowing において他動詞 VS 語順が生産的であることを示すものではない。また、その他にこの作品に現れる他動詞 VS 語順は、(50-53)のように、他動性の希薄な他動詞が起こるものである。Cloud of Unknowing は Richard Rolle よりも、さらに他動詞 VS 語順が生産性を失い、V2 現象が影をひそめていく様子を見せている。

６．２　文頭要素

Cloud of Unknowing において VS 語順を引き起こす要素は、副詞や前置詞句が多く、この点では現代英語と同様であるが、古英語的な古いタイプの文頭要素である目的語も VS 語順を導くことが多い。既出の(53-55)においても、目的語が X 位置に起こっている。その他の例を、助動詞が起こる文を含めて以下に示す。

(59) And [this] **wil** He **do** (1268)

(60) And [that abilnes] **may** no soule **have** withoutyn it. (1282-3)

(61) [Ensaumple of this] **have** we in a man or a womman affraied in the maner beforeseide. (1442-3)

'Ensample of this have we in a man or a woman afraid in the manner beforesaid.'

(62) And [that] **schalt** thou **fele** by this (1748)

(63) [Ensaumple of this] **maist** thou **see** (1773)

他動詞が主語に先行する VS 語順が生産性を失いつつある中で、前節で扱った Richard Rolle においても、本節の Cloud of Unknowing においても、他動詞の目的語が XVS 語順を導く例は少なくない。他動詞そのものの VS 語順が減少しても、助動詞が主語に先行する VS 語順が相当数起こることがこの現象の基盤にあろう。また、this や that を含む前方照応の目的語前置の割合が高いことも、特徴的である。

Warner (2007) は、後期中英語の主節の平叙文に現れる XVS 語順を、後置された主語が起こる位置に関して分類し、詳細な調査を行っている。主語位置の違いにより、主語の長さや、起こる動詞の種類等にそれぞれの特徴があるが、文頭要素に関しては、節内の要素によって下位範疇化された要素が X 位置にある場合は、VS 語順が起こりやすく、その起こりやすさは、結果として生じる XVS 語順の S の位置に関係しないということである。つまり、目的語が X 位置にある場

合は、後期中英語においてもなお VS 語順が起こりやすいということであり、本節の Cloud of Unknowing の調査においても、他動詞の VS 語順の生産性が減少する中で、X 位置の目的語が VS 語順を引き起こす力を保っていることが確認された。

7．まとめ

本稿では 13 世紀前半の作品 Ancrene Wisse、14 世紀前半の Richard Rolle、14 世紀後半の The Cloud of Unknowing の主節に起こる VS 語順を調査し、英語が V2 言語から非 V2 言語に向かう中英語期において、VS 語順の使用に関しどのような変化が見られるのかを調査した。

13 世紀の Ancrene Wisse においては、多様な他動詞が V2 現象を引き起こしており、14 世紀の Richard Rolle や The Cloud of Unknowing に比べて明らかに古英語的な性質を保っている。後者の 2 作品においては VS 語順に現れる他動詞の種類が限定され、他動性をもつ他動詞がこの語順に現れにくくなっている。同じ 14 世紀の作品である Richard Rolle と The Cloud of Unknowing は書かれた年代が大きく異なるわけではないが、やはり 14 世紀後半の The Cloud of Unknowing では他動詞 VS 語順の生産性がさらに減退し、この語順の使用が定型的表現や、認識動詞、状態動詞にほぼ限られている様が観察された。

一方で文頭要素に関して言えば、目的語に導かれる XVS は古英語的な古い語順と言えるが、この語順は V2 が明らかに減少していくなかでも、特に前方照応の要素が前文との連結機能を果たす形で一般的に使われている。他動詞が主語に先行する XVS 語順一般と、他動詞の目的語に導かれる XVS 語順（助動詞と他動詞が共起する文を含む）は、必ずしも並行して減少したわけではない。

資料

Hasenfratz, Robert, ed. *Ancrene Wisse*. Kalamazoo Michigan: Medieval Institute Publications. 2000. TEAMS Middle English Texts Series. ≪http://d.lib.rochester.edu/teams/publication/hasenfratz-ancrene-wisse≫

Gallacher, Patrick J., ed. *The Cloud of Unknowing*. Kalamazoo, Michigan: Medieval Institute Publications. 1997. TEAMS Middle English Texts. ≪http://www.lib. rochester.edu/camelot/teams/cloufrm.htm≫

Horstmann, Carl, ed. *Yorkshire Writers: Richard Rolle of Hampole, an English Father of the Church, and His Followers*. 2 vols. London, 1895-6. Corpus of Middle English Prose and Verse. University of Michigan Libraries. 2003. ≪http://name.umdl.umich.edu/rollewks≫

参考文献

Evelyn Underhill. (1922) ed., *The Cloud of Unknowing*, PDF text, ≪http://www.sacred-texts.com/chr/cou/index.htm≫

Haeberli, Eric. (2002) "Observations on the Loss of Verb Second in the History of English," in C. Jan-Wouter Zwart and Werner Abraham eds., *Studies in Comparative Germanic Syntax*, 245-272, John Benjamins, Amsterdam.

Haeberli, Eric. (2007) "The Development of Subject-verb Inversion in Middle English and the Role of Language Contact," *Generative Grammar in Geneva* 5, 15-33.

Haeberli, Eric. (2010) "Investigating Anglo-Norman Influence on Late Middle English Syntax," in R. Ingham *ed., The Anglo-Norman Language and Its Context*, 143-163, York Medieval Press, York.

Kreyer, Rolf. (2006) *Inversion in Modern Written English: Syntactic Complexity, Information Status and the Creative Writer,* Language in Performance 32, Gunter Narr, Tübingen.

小林美樹（2015）「Malory における文頭要素と倒置・非倒置語順に関する考察」『神田外語大学紀要』第 27 号、1-22、神田外語大学.

Rosamund Allen. (1988) ed. and trans., *Richard Rolle: The English Writings*, Classics of Western Spirituality, Paulist Press, New York.

Warner, Anthony. (2007) "Parameters of Variation between Verb-Subject and Subject-Verb Order in Late Middle English," *English Language and Linguistics* 11, 81-111.